『魔法使いの自明』
1

「先生、今日も魔法見せて！」

　この村に移り住んでから五年ほどが経ち、私の元には毎日のように村の子ども達がやってくるようになった。村には学校があるにも関わらず、教えを説くわけでもない私のことを『先生』と呼び、随分親しくなったと感じる。

「いいぞ。今日は水の魔法だ」

　私は魔法使いだ。この世界において幼い頃に一度は憧れる、そんな存在と言える。しかし、魔法使いはありふれた存在ではない。魔法を使うには魔力が必要で、その魔力を身体に溜め込むことで魔法が使えるようになる。溜め込む魔力の質や量は人によって異なり、『魔法使い』と呼ばれるほど大成するには、それ相応の適性が求められるのだ。

「先生、どこに行くの？」
「いや、ここでやるには狭いだろう。近くの湖まで行こうか」

　話を聞いて納得したのか、数人はとっとと先に湖へと走っていった。私は念のため戸締りをし、短い杖を持って湖へと向かった。湖に向かう途中、先に向かわずに私を待っていた女の子がいた。歩調を合わせると私の隣に立ち、質問を投げ掛けてきた。

「先生は魔法使いになるためにどんなことをしてきたの？」
「そうだなぁ」

　私は回答に迷った。結論から言ってしまえば血の滲むような努力をした覚えはない。魔法に対する適性があること自体は、子どもの頃から理解していたが、努力量で言えば人並みでそれ以上もそれ以下でもなかったと言える。

「知識を得ること……かな？」
「ちしき？」
「えっと、お勉強だな」

女の子は不思議そうな顔をして復唱した。その姿に私は、小さな子どもにも分かりやすい言葉を使う必要があると考えた。村の学校でも聞く、勉強という言葉に言い換えると合点がいったようだった。

「お勉強とは言ったが、学校で学ぶことだけがお勉強ではないよ」

程なくして、私と子ども達は湖の側に着いた。荷物を降ろし、周囲の安全を確認して準備は整った。この村での私の役目は、魔法を使ってこの世界の新たな一面を知ってもらうことだ。

「みんな、良く見ていてくれ！」

さっきの女の子に目配せをした後、魔法を発動させる。右手に持った杖を細かく震わせ、細い管状の水を湖からゆっくりと巻き上げる。そして、空中に滞在し続ける水を曲げたり、分裂させたりすることで１つの姿を造りあげる。

「あ、ガルだ！」
「ほんとだ！」
「良く分かったな！」

ガルとは、この村に住み着いて皆に愛されている野良犬のことだ。誰かの声がきっかけで周りからは歓声があがる。

「どんな魔法使ったの?」
「教えて、教えてー！」

水を用いた魔法をいくつか見せた後、一頻り盛り上がった子どもたちは、私の服の袖口や裾、腕を掴んで魔法の仕組みを訊ねてきた。

「水の流れを操る魔法とその水を支えるための浮遊魔法だな」
「魔法って組み合わせて使えるのー？」
「先生すげー！」

子ども達は大まかな説明ですら喜んで聞いてくれた。魔法の原理については誤魔化すのが常だ。説明しだすと、子ども達では頭がパンクしてしまうだろう。彼らが実際

に学ぶべき時に理解出来れば問題ない。

「ほうほう、今日も楽しんでおるみたいじゃな」
「村長だ！」

　後ろから声を掛けてきたのは、この村を取り仕切る代表者である村長だった。まだまだ元気らしく、私がこの村へ来た時から現在まで、杖に頼る様子も見られない。

「どうも」
「相変わらず面倒見が良いものだね」

　私の周囲を見て、村長は微笑んだ。側から見てみれば、お兄さんというにはやや厳しい年頃の人間が、多くの子どもを引き連れているのだから不思議に見えるのだろう。

「おかげ様で、楽しい限りです」
「私としてもあんたをこの村に迎えられて嬉しい限りだ」
「さっきのもう一回見せてー！」

　村長と話している間も、子ども達は私を揺らして魔法を見せて欲しがる。村長の手元には一通の手紙があり、私に用があってここまで探しに来たのかもしれないと気にかけていた。

「後で構わん。相手してやりなさい」
「じゃあ、折角なので村長も見て楽しんでください」

　こちらの思惑に何も言わずとも、村長は頷いて待ってくれるようだった。木陰に移動し、子ども達の輪を眺めていた村長は哀愁漂う目をこちらに向けていた。

2

「先生また明日ねー！」
「気を付けて帰れよー！」

　それから一時間ほど遊び、日が暮れる時間になったため、子ども達は各自家へと帰っていった。夕日が照らす湖の側で取り残されたのは、私と村長の二人だけとなった。

「お待たせしました」
「まぁ、腰掛けてくれるかい」

　村長は横に来いと木の根元指を指した。私はそれに従って、側に座る。

「国から手紙が来ておったぞ」

　村長から一通の手紙が手渡される。私宛の手紙を何故村長が持っているかについては、現在の住居が元々は村長の持ち家だったため、手紙の配達先が村長の家にまとめられているのだ。

「国……ですか」

　私はその手紙の封を切ることに僅かながら躊躇いがあった。

「開けて見んことには何も分かるまい」

　腕を組み、瞼を閉じた村長が静かに言った。村長の言う通りだろう。内容が明らかになってからでも遅くはないと、息を整えて手紙の封を切る。

「戦争の招集命令……」
「……そうか」

　最初に目に入った文字、それだけで十分だった。この村では扱うことすら出来ない高級な便箋と刺繍が酷く悪魔的だと心が痛む。

「また戦いが始まるのか」

　隣国との戦争が一時休戦となったのは六年前だ。戦争時、私は貴重な魔法兵として戦地に赴いていた。戦場とはまさに地獄と言っても過言ではない。自分自身を守るこ

とすら一筋縄ではいかず、常に生死を賭けた怒号が飛び交っていた。
　この手紙が私に届いた時点で拒否権はない。村長も重々理解している。だからこそ、村長には必要のない手間をかけさせてしまったと申し訳なく感じる。

「一介の村の長をやっているわしですら、国の偉いさんは何を考えているのか分からん」
「知りたいとも思わないですよ、私は」

　村長はこちらを見ずに夕日を眺めていた。無言の時間が続き、風で揺れる木々の音が胸騒ぎのようで息苦しく感じた。

「招集はいつなんじゃ」
「一月先です。猶予は…設けられている方でしょうね」
「何かしてやれることはあるか」
「どうでしょう。私はこの村に来て沢山のことを知りました。縁もゆかりもない私をこの村は家族のように受け入れてくれた。それだけで十分です」

　幼い頃に両親を亡くし、国に魔法使いとしての才覚を買われ、魔法を学び続けてきた。そんな人生を送ってきた私にとって、この村での生活はあまりにも出来すぎた話だ。

「……なら何も言わん。普段通り過ごしなさい」
「あと少しの間、よろしくお願いします」

　一言だけ呟いて、村長は湖から去っていった。私は湖面に映る自身の顔を日が暮れるまでぼんやりと眺めていた。

3

「作戦開始、魔法部隊撃て！」

　指揮官の号令の下、複数の火炎弾を敵地へと飛ばす。主戦場となっている国境近くの草原では、金属か血か判別のつかない匂いが充満し、各方面で黒煙も上がってい

た。

「戦況はこちらが優勢だ。前線の兵を援護しろ！」

　指揮官の野太い声が響き渡る。何もかもが順調だと、次の魔法を唱えるその瞬間だった。

「まずい……ッ！」

　飛来した火炎弾が急に進路を曲げて、魔法部隊の元に着弾したのだ。私は咄嗟に魔法を切り替えて応戦しようと思ったが、威力に負けて吹っ飛ばされた。

「おい！」

　何とか立ち上がり、今日一の声を張り上げて周囲を伺った。身体の痛みは恐らく火傷と腕の骨折だろう。何が起こったか、自分の置かれた状況を未だに整理出来ていない。誰も立ち上がってこないのだ。私の声がかき消されたのだろうか。

「返事してくれよ」

　辺り一帯は火の手に包まれており、私自身生きていることが不思議なくらいだった。だからこそ出来ることは一つだった。温情を感じたことがあるわけでも、仲の良い知り合いがいたわけでもない。しかし、同じ国の兵士がやられたのであれば、敵を取らなくてはならない。

「こうなったら…！」

　魔力を込めた一つの光は敵陣上空へと向かい、無数の光となって降り注いだ。

「やめろ！」

　自制の掛からない姿に、私は叫んだ。次の瞬間、周りは私が住んでいる家そのものだった。布団にはびっしょりと汗を掻いており、先ほどの映像が夢であったと安堵し

た。
　戦場を去り、しばらくして見なくなっていた夢だが、戦争への招集が近づくにつれて毎晩のようにうなされる。紛れもなく私自身が体験した戦争のワンシーンであり、あの光によって、どれほどの死者や怪我人が出たのかは定かではない。

「俺は人を殺したくて魔法を使うわけじゃない」

　休戦後、その戦果が讃えられ褒賞もらうことになった私は、どんなものよりもまず、国の兵士としての任を降りること願った。国からすれば到底許されることではなく、一時的な解任と有事の際には招集に従うことで決着がついた。
　怪我の治療に半年、それから国内を転々としていたところで、現在生活している村に辿り着いた。私がこの村を訪れた頃、村は収穫祭の催しを開いている最中だった。彼らからすれば、村に訪れる旅人自体が珍しく、その人間が魔法使いだというのだから、偶然とはいえかなり気に入ってもらえたようだった。

「今年の収穫祭には間に合わないな」

　村へ住み始めてから毎年参加していた収穫祭だが、今年の開催までは少なくとも 2 月以上ある。もう一度参加したいと願うのは傲慢だろうか。

　気分の上がらない朝、私は用があり散歩がてら村長の家まで歩いていた。村の様子がどこか騒がしく、人の往来もいつもより激しい気がした。

「村長、畑仕事お疲れ様です」

　村長は毎日、朝早くに自宅の畑の様子を見に来る。今日も変わらず畑仕事の最中だった。

「丁度いいところに来てくれた。少し手伝ってはくれないか」
「分かりました」

　その後は三十分ほど村長の畑仕事を手伝った。手伝いをする最中も、村はいつもより賑やかだと感じた。

「今日は村で何かあるんですか」

「ああ、そう言えばあんたには言い忘れていたね」

村の様子を指さして伝えると、村長は思い出したかのように話し始めた。

「今年は収穫祭の開催が早まったんじゃよ」
「収穫祭が早まるって……」

収穫祭は例年決まった月の三週目に行われていたはずだ。神様から恵んでいただいた野菜や果物、畜産に感謝する祭りだと聞いていた。大雨の年でさえ、決まった日取りで行われた祭りだ。伝統に重きを置いた祭りの開催時期が変わることがあるのだろうか。

「なに、大して気にすることじゃあるまい」

焦った様子の私を村長は制した。村長が何かの思い付きで、開催時期を変更するとは考えにくい。当然、口を出す権利がないことは私が一番分かっている。

「この村を去ると、子ども達に伝えたのじゃろ」
「ええ、ある日煙のように消えるのも、忍びないですから」
「全く、わざわざわしの元にまで、事情を聞きにきたわい」
「それはご迷惑お掛けしました」

謝る私に一息ついた村長は頭を掻く。

「あんたのお陰で、村の子ども達が優しい子に育っているのを実感できたわい」
「私は何も」
「無意識ならそれで十分じゃ。心配事があるなら、あんたも一つや二つ、祭りの準備を手伝ってくると良い」

そう言われて、私は自然と村長の家から出た。残された時間はあまりにも短い。村の人達と最後まで交流を深めるのが筋だろう。私は村長の言葉をそう解釈した。

「……お祭りで送り出したいとまで子ども達に言われてしまっては、わしも動かんわけにはいかんわい。あんたが思っている以上に、あんたはこの村の一員になっているみたいじゃな」

村長は独り言のように呟いた。村中の了承を得るまでにどれほどの時間がかかるかと危惧していたが、まさか全員が二つ返事で了承するとは驚きだったと振り返る。

「わしも準備せんとな」

4

「先生早く来て！」

収穫祭当日、子ども達の迎えによって目を覚ました。寝坊した理由は、あるイベントのための最終調整を行っていたため、珍しく夜更かしをしてしまったからだ。
私は子ども達に連れられ、収穫祭の本部へと向かった。道中では既にあちこちで催しが始まっており、本部である村長宅の手前にある広場では、いくつもの屋台が商売を行っている。

「村長、すみません。寝坊しちゃったみたいで」
「祭りはこれからじゃ。全ての出店を回る勢いで楽しみなさい」

収穫祭は二部制となっている。昼の部では、一年を通して神様からいただいた収穫物を色んな料理で美味しくいただく行事だ。夜の部では、これから一年の豊作を神様に祈る行事となっている。
子ども達は私と一緒に出店を回るため、広場へ連れて行こうと服を引っ張る。そんな子ども達を宥めつつ、私は村長と話を続ける。

「以前お願いしていた話も何とか間に合いそうです」
「……分かった。みんなの良い思い出にしてやってくれ」

その一言だけ伝えると、村長は手で追い払うような仕草を見せ、私は子ども達に外へと連れ出された。どうやらあれは村長の癖らしい。他人を思うが故だとか、照れ隠しだとか、その手の意味はかなり広く使われると村長の知人は言っていた。向こうからしても、用件は済んだのだろう。

「みんな、案内してくれるか」

　子ども達の目線に合わせてお願いすると、みんなは大きく頷いて返事をしてくれた。

　それからは怒涛の一日だった。村長の言ったように全部の出店を回ったと思う。子ども達の元気は底知れずで、次から次へと立ち食いできるような料理をもらってくるため、食べきるのがとても大変だった。出店を取り仕切る人の中には、引き連れた子ども達の親御さんもおり、何度もお礼を伝えてくれた。それに対して私も恩を伝えると、お互いに頭をペコペコと下げる様子を子ども達が笑っていたのも印象的だった。
　それに、食事だけではなく子ども達が遊べるような出店もあった。射的では、パチンコの性能が微妙だったために、魔法で補強して景品を獲得し続けた。当然、店主には大人気ないと怒られてしまい、恥ずかしい限りだった。

　子ども達とひたすら遊んでいるうちに、日は完全に落ち、広場のかがり火には火が灯されていた。村中の人々が片付け半分で広場に集まり、神様からの恵みに感謝する儀式を行う。設置された神棚には、今年収穫した野菜や肉が大皿に盛られている。

「静かに見てようか」

　私は儀式自体には関与せず、子ども達と儀式の様子を見守っていた。普段は穏やかな顔をしている村長も今だけは険しい顔をしている。この儀式に参加するのも最後になるのかもしれないと思うと、この村を去る実感が湧いてきた。

「行きたくはないけど、この祭りがこれからもずっと開催されるなら…」

　この国を守ることが、この村の人達を守ることに繋がるのならば、私は憂いなく戦地へ行ける。誰かの役に立ちたい。今まではぼんやりとしていたその願いに、確固たる人物が思い浮かぶようになったからだ。

「どうしたの？」
「いや、何でもないよ」

　つい独り言が漏れてしまっていたようで、側にいた子がこちらを向いて首を傾げる。子ども達には何も伝える必要はない。きっと、村長を始めとした村の人達が、知

るべき時に真実を伝えてくれるはずだ。
　儀式の様子を目に焼き付ける。炎の揺れ、煙の匂い、人々の声、どれもが似ているようで戦場とは全く違う。私に宿る魔法使いとしての力も、使い道が異なれば自分の手を汚さずに済んだのかもしれない。それでも、私は魔法使いとして懸命に生きることを選択した。
　今日は、私が魔法使いとして出来ることを、存分に披露して皆に夢を見せる番だ。

5

　それから 20 分ほどして、儀式は無事終了した。例年なら収穫祭の行事は全て終わりとなるが今年は違う。

「では、後は任せるぞ」

　終わりの挨拶を終えた村長から声が掛かり、皆がこちらを向いた。

「合図をするまで、ここで待っていてください！」

　子ども達に囲まれたその場から、魔法を使う。自身の身体を浮かせて、村の南の登山口まで、速度を上げて進んでいく。この浮遊魔法を披露するだけでも、皆からは歓声が上がるが、私が見せたいものは別にある。

「あとは、自分の実力を信じよう」

　所定の場所に着き、集中力を高める。事前に練習を重ねたシミュレーション通りの手順で、魔法を組み合わせていく。手元で一つの光源になった頃、私は声を反響させる魔法で村中に響くような声を出す。

「いくぞー！」

　私は合図と共に、持っていた光源を上空へ解き放つ。線を描いて宙に浮かんだ光は、一瞬の暗転の後、音を鳴らして同心円状に大きく広がった。光は様々な色に分かれ、更に分裂を続ける。これは、国の兵として訓練を受けていた頃に、図書館で見つ

けた記述を参考にしたもので、東方の見世物である『花火』だ。本来の手法とは違うものの、私は魔法で再現することに拘りたかった。

「まだまだ！」

上空の景色を余所目に、私は魔法の詠唱を続ける。今度は先ほどよりも小さい光源を両手に収まるくらい用意し、いっぺんに投げ飛ばす。横に広がった光は、一斉にパラパラと音を立てて細かい点滅を繰り返す。

「思ったよりもきついか」

魔法製の『花火』を何度も放ち、汗を拭う。最初はストックしながら放っていたものの、徐々に詠唱にかかる時間が増えていく。

「最後は一番大きい花火を上げないとな」

手元に残していた花火を見てもらう間に、もう一度魔力を込める。魔法の元となる光の束を何重にも重ね、今までで一番大きい光の玉が出来上がる。

「これで……最後！」

力を振り絞り、花火は上空に打ち上がる。私は地面で仰向けになって、花火の行く末を目で追った。広がる花火をまともに見て、成功だと確信した。今まで、文献上でしか見ることの出来なかったものが、方法に違いはあるが、確かに目の前に存在している。

「綺麗だ……」

最後の光が消えるその時まで、私はずっとその景色を目に焼き付けていた。最後の花火を見届け、私は村の広場まで空を飛んで戻る。

「あ、帰ってきた！」

村中の人達が手を振って出迎えてくれる。軽やかに着地し、そのまま村長の元まで向かう。

「どうでした」

「想像以上じゃ、これほどの思いは久しぶりじゃよ」

　村長は明るく笑っていた。村長の言葉に続いて周囲から、喜びと感謝の言葉が次々と沸き上がった。

「……事実を伝えろとは言わん。最低限、皆に伝えておくことがあるんじゃないか」

　村長は私に伝えた。挨拶をしておけと、そういうことなのだろう。

「皆さん聞いてください。事情があり、私はこの村を出ることになりました。この村で過ごした五年という短い月日の中で、私は人の暖かさを知ることが出来ました。余所者だった私を受け入れてくれた村長を始めとした皆さん。興味を持って接してくれた子ども達。全てが私にとっての宝物であり、あまりにも勿体ないものです。」

　この村での出来事を思い出す。目元には涙が浮かぶが、強く振り払う。

「今度、私がこの村に帰ってくる時には、本物の『先生』になって帰ってきます。皆さんにはこの世界のことを、もっと知ってもいたい。永く掛かってしまうかもしれませんが、待っていて欲しいです」

　握りしめていた手が震える。息が詰まって言葉が出てこない。

「私にとっての故郷はずっとこの村です。お世話に…なりました」

　頭を下げる頃には、涙が堪えられなかった。周りからもすすり泣く声があちこちから聞こえてくる。

「最後にあんなもの見せられてしまっては、あんたのことを忘れる奴なんてこの場にはおらんわ。必ず戻ってこい」

　村長は笑顔で私の肩を叩いた。悲しみの強い雰囲気から一転して、笑いのある空間へと生まれ変わる。

「そのための計画ですから」

　村長に釣られて私も笑顔になる。私にとって、掛け替えのない一日として、特別な収穫祭は記憶に刻まれた。

6

「……嬉しかったな」

　あの日、花火で彩った空を、私は今も見ている。手を伸ばそうとしても届かない、はるか遠い存在だ。村での記憶が流れるように蘇る。最後の機会にちゃんと言えて良かった。あの場で挨拶をさせてくれた村長の気遣いにも感謝しないといけない。

　身体を起き上がらせようと力を入れる。しかし、力は抜ける一方で、一向に持ち上がらない。魔法を使えるだけの魔力ももう残っていない。

「終わりか」

　雑踏の中で、拾える音が遠くなっていく。意識するたびに五感が薄れていくのを感じる。自身の限界が来ていることは理解していた。

「もう一度……みんな願って、る……」
　最初にあの村を訪れた時から、私はあの村のことがずっと大好きだった。これは、ある一人の魔法使いの自明だ。
　懸命に手を伸ばすが、力なく崩れ落ちる。

　叶うならもう一度、あの村へ戻りたい。皆の笑顔をみたい。
　私は戦場の片隅で目を閉じた。

2023/10/13